

共生社会の実現に向けて 地域と共に暮らす

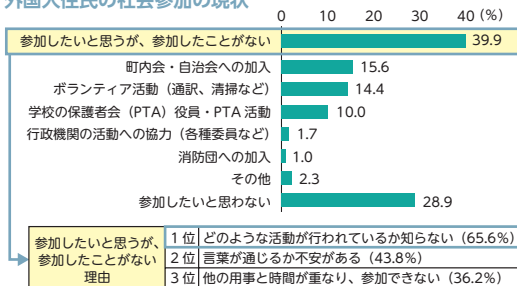
市では、国籍や民族などが異なる人同士が、互いの文化的な違いを認め合い、そこに住む人たちが等しく安心・安全に暮らすことができる「多文化共生」のまちづくりを目指しています。今回は、沖水地区にある松之元自治公民館の取り組みを紹介します。

◎問い合わせ 国際化推進室 ☎23-2295



日本語教室で日本語習得に励むファン・シー・ヒェウさんら

外国人住民の社会参加の現状



約10年で3倍に増加
令和6年8月時点の本市の外国人住民数は2351人で、平成25年8月時点の782人から約3倍に増加。外国人住民の国籍も43カ国と多様化しています。
国の調査（外国人住民の社会参加の現状）によると、自らが住む地域でどのような活動が行われているか知らない外国人住民の声が多く、職場以外でのコミュニティに属していないことが生活の不便さを感じている一因になっていると考えられます。

地域住民と外国人住民をつなぐ

県は、外国人住民の住居確保や、地域コミュニティとの交流という課題の解決を図るために、公営住宅を活用したモデル実証事業を実施しています。

松之元自治公民館では、本事業を活用し、2月から市内の農業法人に勤めるベトナム人技能実習生6人を地域で受け入れています。毎月地域の清掃活動や行事を通して、外国人住民と交流を図っている本館。9月から市が主催する日本語教室に参加しているベトナム人住民のファン・シー・ヒェウさんは「日本語をもっと話せるようになって、近所の人や会社の人たちと色々な話をしてみたい」と笑顔を見せていました。

これからの多文化共生

私たちがこのまちで安心・安全に暮らしているためには、1人でも多くの理解や協力が求められます。国籍や文化の違いにとらわれず、互いを認め合いながら持続可能なまちづくりをしていく必要があります。多文化共生社会を実現するために、私たち1人1人が同じ都市に暮らす外国人住民への理解を深め、互いに歩み寄りましょう。



松之元自治公民館
館長 上野 和秋さん

外国人住民との交流が地域の活気に

2月に引っ越してきたヒェウさんら6人。当初はリサイクル資源の分別などが難しかったようですが、近所の人たちに教わり、少しずつ生活のルールにも慣れてきたように思います。毎月の環境美化活動をはじめ、六月灯の準備やグラウンドゴルフ大会など公民館の行事に若い6

人が参加してくれると、地域の人たちも和やかな雰囲気になり、活気を感じます。

これから地域行事への参加を通じて日本の文化を感じてもらったり、私たち地域住民も彼らを通じて外国の文化を学んだりできればうれしいです。



まちなかで 憩い・学び・楽しむ「たまり場」

Mallmall 来館者1000万人到達

◎問い合わせ 商工政策課 ☎23-2983

まちなかの新しいにぎわい

平成23年、中心市街地の中核店舗であった百貨店（旧都城大丸）が閉店。まちに活気が失われる中、にぎわい再生を図るため、平成27年から官民協働で当跡地を活用した公共施設と民間施設を複合的に整備する事業に取り組みできました。紆余曲折を経ながらも、公共施設は中心市街地中核施設Mallmallが平成30年4月に開館。民間施設は民間複合施設「TERRAZZA」が令和4年4月にオープンしました。

6年5カ月で来館者1千万人

市立図書館やまちなか広場、まちなか交流センター、保健センター、子育て世代活動支援センター「ぶれびか」などの施設が集約されている



“記憶”に刻まれる施設を目指して

商工部
あきひろ
横山 哲英 部長

かつての中心市街地には、多くの商店や百貨店が立ち並び、平成や令和生まれの人が想像もできないようににぎわいにあふれていました。家族で映画を観て、百貨店を回り、食事をして帰った休日。そうした中心市街地での思い出は、今でも多くの人の記憶に刻み込まれていると思います。私は、形は違えども、かつての中心市街地のように“記憶”に刻まれる多様な体験ができる施設を目指して、Mallmallの整備に携わってきました。ここで過ごした時間が、多くの人たちの記憶に刻まれ、故郷の原風景となることを願いながら、憩い・学び・楽しむ「たまり場」づくりを続けていきたいと思っています。

Mallmall



まちなかの憩いの場として親しまれている同施設には、開館当初から世代を問わず多くの人が訪れています。

9月14日には、開館から6年5カ月で来館者が1千万人に到達。1千万人目の来館者となった金丸彩佳さん（平塚市）は「Mallmallでは、ぶれびかで子どもと遊び、帰りに市立図書館で絵本を借りています。子どもだけでなく、大人もゆっくり自分の時間を楽しめるのが魅力」と笑顔を見せていました。